



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	水稻第1期の生産費
Author(s)	池原, 真一
Citation	琉大農家便り(70): 4-5
Issue Date	1961-09
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20442
Rights	

水稻第1期の生産費

1. 農産物生産費調査の目的

農産物生産費とは、米、甘藷、甘蔗など、それぞれの農産物を生産するために使った費用の合計でありまして、これは農産物のある単位数量、例えば米やさつまいもの場合は100kg当り、さとうきびの場合は1,000kg当りに対して何程というように価額であらわすのが普通であります。

農産物の生産費調査は、日本では大正10年の米穀法の成立の時から実施されて今日におよんでおります。沖縄でも戦前は他の府県と同様に実施されていましたが、戦後は1954年に、はじめてこれが実施されました。色々の事情で1時中断されていましたが1959年から再び調査が始められました。生産費調査は国の政策として、米の価格を決定する材料として、又は農業経営を改善するための材料として使われております。

又個人の経営の立場からは自分で作った作物を販売した場合、損をしたか、得をしたか、又どの作物が一番有利であったか、どの点を改善すれば生産費の引下げが出来るか等、農業経営の改善の上に色々と利益を与えるものであります。

2. 生産費目と費用

生産費を構成している費用は次の通りであります。

(イ) 種苗費

自分の家で生産された種苗(籾、野菜の種子等)および外から購入した種苗を価格に計算したもの。

(ロ) 肥料費

自分の家で出来た堆肥や緑肥、および硫酸や過燐

酸のように買った肥料の代金であります。

(ハ) 諸材料費

これは機械の油代とか、たばねるためのわら、縄或は光熱材料等の代金であります。

(ニ) 水利費

土地改良区の費用や水利組合などの費用であります。

(ホ) 防除費

病虫害防除のための薬品代。

(ヘ) 建物費

建物は使用するにつれ年々価値を減じていきます。この価額を減価といひます。この調査作物に使われた建物や土地改良施設などの減価償却額と修繕費。

(ト) 農具費

耕耘機や犁のような大農具の減価額と修繕費および鋤、鎌、へらの購入のための費用。

(チ) 畜力費

調査作物のために使った役畜に要した費用で、他人から借りたものも、自分のものも計算する。

(リ) 労働費

自分の家族の労賃および臨時雇や年雇に対する労働賃金の合計額。

(ヌ) 賃料料金

調査作物の生産に使った固定資本の賃借料(建物、農具等)。

以上10費目の合計が生産費であります。次に沖縄における1960年の水稻第1期の生産費を費目別に金額とその割合で示せば次の通りであります。

	種苗費	肥料費	諸材料費	水利費	防除費	建物費	農具費	畜力費	労働費	賃料料金
金額	\$ 1.53	5.70	0.23	0.17	0.45	1.15	1.67	3.02	26.15	1.03
比率	3.7%	13.9	0.6	0.4	1.1	2.8	4.1	7.3	63.6	2.5

費用の合計は41弗11仙で、これから副産物収入、即ち
わら代金 3弗49仙を差引いた37弗62仙が水稲1反歩を作
るのに要した費用で、これを第1次生産費と言います。
この外生産に参加したのとして自作農家の場合は、自
作地の地代と自分の資本に対する資本利子も考えねばな
りません。前の第1次生産費にこの二つを加えたものを
普通第2次生産費と呼んでいます。第1期の場合、第2
次生産費は54弗49仙となっています。

1960年の第1期は54弗49仙の費用をかけて、54弗29仙
の収入でありますので、反当り20仙の損失だということ
になります。所が農家に入ってくる所得は前にあげまし
た費目の中で自分の家で作ったもの、或は生産されたも
の、或は自分の家族の労賃、自作地の地代、自己資本の
利子等があります。それを計算してみますと 44弗 70仙
で、それは第2次生産費の82%の多きを占めています。

しかしこの所得は見積りによって計算されますので見積
りの如何によって所得に差を生ずることは当然であり
ます。とにかく米は生産費をつぐない得る価格以上に売
れることが望ましいことであります。

3. 生産費中の労働費と肥料費

水稲第1期の生産費の中で、1番費用のかかっている
のは労働費で、これが全体の63.6%の多きを占めており
ます。次は肥料費の 13.9%、畜力費の7.3%の順で他の
費目の比率は非常に少ないのであります。これを日本の
1958年の反当生産費についてみますと、その順位はやは
り沖縄の第1期と同じで、第1位は労働費の49.9%、次
いで肥料費の19.8%、畜力費の 7.7%の順となってい
ますが、その比率においては相当の差があります。生産費
の中で費用が沢山かかっている以上三つの費目につきま
して日本と沖縄を比較してみましょう。まず労働費につ
いてみますと比率において沖縄の方が高く、金額におい
ても沖縄の方が日本よりも多くかかっています。

即ち、沖縄の方は反当り労働時間168時間に対し 26弗
の費用がかかっています。これに対し日本では反当労働
時間は 181時間で沖縄よりも多くかかっていますが、費
用は少く23弗しか、かかっていません。これを1時間当
りに計算してみますと沖縄の方が 2仙余計にかかっている

こととなります。それは沖縄が日本よりも労働賃金が
高く、そのため自分の家族の労働賃金の見積りが高いの
に原因していることと思います。次に肥料費であります
が、沖縄では5弗70仙かかっていますが、日本では9弗10
仙もかかっています。今反りに金肥を沖縄と日本が同じ
量施しているとしましても沖縄の場合運賃や色々の費用
がかかりますので日本よりも費用は多くかかるはずであ
りますが、実際にはかえって少なくかかっているのでは
ありません。これは肥料の施用量が日本に比べて少ないた
めでありましょう。一方反当収量は随分少ないのでありま
すから沖縄の場合もっと肥料を多く施すことにより収量
も増加することと思います。先に申し上げました労働費
の増加も肥料費の場合と同じことが言えると思います。
即ち苗代の手入や本田の手入をもっと念いりにやること
により今までよりも生産量の増加が可能です。畜
力費につきましては日本と沖縄とは大差はありません。
即ち、日本が3弗25仙、沖縄が 3弗2仙となっています。

生産費の合計についてみますと、沖縄が41弗、日本が
46弗でありますから日本の方が 5弗多くかかっているこ
とになります。しかし反当生産量を比較してみますと、
日本が 415kg (玄米) の収量に対し、沖縄の方は 253kg
で、重量において162kg、容量において実に1石8升の差
ということになります。日本では玄米 100kgを生産する
のに11弗かかっていますが、沖縄では16弗もかかっています。
それは反当収量の多少に原因しています。

日本と同じように11弗で 100kgの玄米を生産するには、
生産費目のどれかを引き下げねばなりません。どの費
目をどれだけ引き下げるかは農家によってちがうと思
います。生産費の引き下げによって生産量が低下しないよ
うに注意することが大切であります。沖縄の場合生産費
の引き下げは反当収量の増加による方法がよいと思
います。費用はいくら多くかかってもそれによってうんと
増産が出来ればその方がよいでしょう。それにはよい品
種をえらぶとか、堆肥や緑肥の増施とともに金肥の施
用量も増やしていくとか、栽培技術を合理的に進めてい
くことが大切であります。

(注) 企計統計局……統計月報
農林省……米生産費調査報告 } による

(池原真一)